

当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

「パレスチナ／イスラエル紛争の変容：最終的地位と新たな課題」（令和4年度第2回研究会）

日時：令和4年10月15日（土曜日）

午後2時～午後7時

場所：本郷サテライト／Zoom によるオンライン同時開催

報告者名・報告タイトル：

今野泰三（AA研共同研究員・中京大学）

「ポスト・オスロ合意期における植民地主義研究の再評価と進展」

児玉恵美（AA研共同研究員・東京外国語大学）

「レバノンにおけるパレスチナ難民帰還権への意識」

今野泰三氏（AA研共同研究員・中京大学）の報告では、パレスチナ／イスラエル研究における植民地主義と入植者植民地主義の概念及び分析枠組みの意義と課題を論じることが目的とされた。はじめに、パレスチナ人の入植地問題と植民地主義概念を論じた先行研究の内容と課題を整理し、入植者植民地主義概念の意義が、パレスチナ人が行ってきた反植民地主義研究と帝国主義論から展開してきた植民地主義研究を架橋するところにあると述べた。次に、同概念の幾つかの課題を示した上で、被植民者を対象とした様々なレベルからの分析が必要だと指摘した。最後に、ベドウィンを対象とする報告者の今後の研究方針が示された。

質疑応答では、入植者植民地主義の位置付け、ジェンダーの視点、ベドウィンに着目する意義などの議論が提起された。

児玉恵美氏（AA研共同研究員・東京外国語大学）の報告では、レバノン国内のパレスチナ難民の境遇を、シャーティーラー難民キャンプの変容から論じることが目的とされた。その中で、先行研究を整理した上で、現地調査におけるパレスチナ難民の語りから見えてきた難民キャンプへの愛着、殉難者墓地に対するパレスチナ難民の認識・利用のあり方から、同キャンプにおける政治的暴力が持続していることを指摘した。

質疑応答では、聞き取りの対象者の選定方法、殉難者墓地の存続する背景やパレスチナ難民への働きかけ、死者の語りのあり方などが活発に議論された。

浪内紫雲（東京外国語大学大学院修士課程）

（以上）